銀髪と鬼児

haya4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀髪と鬼児

【Ｎコード】
Ｎ３２２３Ｓ

【作者名】
ｈａｙａ４

【あらすじ】
無明神社に住んでいる人食い銀髪。ある日、ぶくぶくに着ぶくれした着物姿の少女がお参りに訪れる。
さっそくおどろかしてやろうと思ったら……

1. 綿菓子

無明神社は人を喰う

変な噂を流されたものだ。人の世ではこういうのを営業妨害という。訴えたら勝てる。無明は目をまばたいた。晩夏の風はまだぬるい。どこかで間の抜けた蝉の声がする。アブラゼミの。死に損ないか、気が違っているやつだ。布を裂くような声で鳴く。

そのとき、無明は縄張りに誰かがはいってきたのを感じた。おお、と鼻腔を広げる。

「無明は人を喰うぞ」

長い銀髪を揺らして、大喜びの無明は唇を舐めた。

鳥居に一礼してやってきたのは、綾織りの着物の幼女である。

1，綿菓子

綿菓子。
無明は社の屋根の上に寝ころび、雨どいのところから顔を突き出した。長い銀髪が蜘蛛の糸のようになんぼんか垂れ下がる。そうやって上から、賽銭箱の前で手を合わせる少女を見下ろしながら思った第一印象が「綿菓子」である。
白い肌、等身の低いちまちまっとした身体に、何重の着物で着ぶくれさせられているので、ころっと丸い。楊枝のような指先と足が飛び出ていて、若い髪の毛は黒々としているが、ずいぶん短く乱暴に刈りあげてある。
綾織りを着ているくせに、身分が知れない。
切り餅のような手を合わせて、なにやら一心に祈っている。ちなみに、ほぼ崩れている拝殿の中には何も居ない。無明は「フリ」をして、ここに住み着いているだけだ。
綿菓子はまだ祈っている。少し悪戯心があらわれて、無明は長い銀髪をちょいと操って、そろそろと毛先を伸ばし、綿菓子のむき出しのうなじをつっつついた。
「やっ」
と、双肩をびっくりさせて、綿菓子はあたりをきょろきょろきょろする。ころころろした生き物がきょろきょろする様が愉快で、無明はさんざ銀髪で綿菓子をからかった後に、
「銀髪無明は人を喰うぞ」
そう言って、少女の目前に降り立った。拝殿のすずが、ごろん、と鳴る。朽ちて傾いだ賽銭箱の上に、銀髪の無明はけもののように着地する。
「ここが人食い無明が住処と聞いての願い事だろうな」
少女は少なからず驚愕していた。丸く大きなひとみが見開かれ、

片足が中途半端に後じさる。無明はこの神社でなんびゃく年も人間を驚かしてきたが、少女の反応はあまり子供らしくなかった。そこらの下品なこどもとは違うのか、綿菓子をじっくり見つめる。
何年ぶりの人間だろう！　近年の噂のせいで、めっきり食事の機会が減ってしまっていた。まだ脂ののりきっていないこどもだが、白い肌や柔らかそうな瞳、なにより甘そうな血のにおいがする。銀髪の無明は思わず相好を崩した。さて、どう出たものか、とその緊迫した空気を楽しんでいると、
「あ、あのっ……」
口をきいたのは綿菓子の方だった。これは初体験だったので、無明は思わず「えっ」と零してからあわてて口を押さえる。まさか、まさか少女のほうに口火を切られるとは思わなんだ。少女の声は、蚊の鳴くようで、声量の上澄みでしゃべっているようだった。
「わたしを……」
そのとき、突然、参道から巨大な鉄の塊が、とんでもないなり声とともに飛び込んできた。もともとぼろぼろだった鳥居が、砂糖菓子のようにぽきっと折れて、粉々にふっとんだ。無明はその光景を現のものかと疑った。鉄の塊――全長約五メートル全幅二メートル、米軍用車シビリアンモデル・ハマーである。それは、ロデオように境内をめちゃくちゃに暴走し、地面がゆっさゆっさと揺れる。
「は……？」。無明が銀髪の毛先すら動かせずに、ぽかんとしていると、そのハマーが、そのハマーが、怒鳴った。「見つけたぞ、娘ェエ！！！」――そのまま、ハマーは賽銭箱の前の綿菓子に突っ込んだ。
「なんだこりゃあっ！」
無明は間一髪のところで飛び上がったが、すぐ足下で、拝殿の前面がハマーに食い散らかされているのを見て、息を呑み込んだ。思わず、賽銭箱と共に消し飛んだ少女のことを目で探す――敷地のはずれ、雑林の根本に、ボロ雑巾のようになっている綿菓子を見つけた。無明は咄嗟に空から降りて、少女の元に立った。

少女はまだ生きていた。無明が傍らにいるのに気付くとうすく目を開ける。顔や手や、肌の出ていたところからひどく出血していた。
「ああ！てめっ！　せっかくのオレの食い物、きったなくしやがって！」
無明は頭を抱えて、銀髪の毛先を動かして少女の身体を持ち上げてやった。綿菓子のように柔らかく甘そうだった女児は、血と泥ですっかり汚れており、見る影もない。血が流れているのを見て、無明が思うのは、慈悲ではなくて「もったいない！」。少女はなにごとか言おうと口をぱくぱくしているが、無明はそれにまるで耳を貸さず、すぐさま、少女の額の傷に唇をあてて、流れ出る血をべろりっと舐め取った。
とたんに、舌に甘い甘い心臓の味が広がり――
「げえっ！！！！」
舌が蒸発せんばかりの激痛に襲われた。それはもう、舌に鉄ごてを当てられたような、強力な酸をぶっかけられたような衝撃だ。口を押さえ、銀髪の青年は絶望に悟った。
「こ、こりゃあ、人間の血じゃねえっ！　お、鬼児（おにご）の血じゃねえか！」
最悪だ――頭が痛みと衝撃で真っ白だ。しかし驚いている暇もなく、あの暴走ハマーが再度狙いを定めているのを、無明は涙の浮かんだ目の端で見た。やべえ、飛んで逃げるにも、今の痛みで動きが鈍る――「銀髪さま」。耳元で少女の声。
「わたしの、衣を、剥いでくださいまし」
正直、ええっ、と思ったが、無明は迷わずに、銀髪を操って（両手は口元から離せない）、少女の着ているたくさんの着物の、一番上の綾衣を剥ぎ取った。すると、みるみる少女の身体が癒えていき、そして、無明は彼女がとんでもないものであることを認識した。綾衣を脱いだとたんに、脱皮したかのように、妖気がぼろっと漏れてでたのだ。
その丸いからだから発散されている妖気が、無明の目にはまぶし

いまでの光でもって爆発する。ハマーの鉄の身体が、めりっと軋むのを無明は確かに聞いた。そして、大地を裂くような音を立て、やがて消滅した。
　残ったのは爆撃でもされたかのようにボロボロの社殿（実際爆心地）である。頭上で木の葉ががさっと言うので、無明はようやく我に戻った。舌のヒリヒリはまだ収まらない。つい三分前まで、さびれて、忘れ去られた、しずかな土地だった場所が、ハマーに踏み荒らされ、そして爆発に見舞われたのである。現在と三分前を結びつけるのに、人食い無明はものすごく時間を掛けた。
「オレ、鬼児の血を舐めっちまった……」
　鬼児の血を舐めるということは、それは実は、妖怪のあいだでは有名な呪いである。
　鬼児に取り憑かれてしまうのだ。鬼児が大人になるまでの五百年間。鬼社会といえば、妖怪界でも畏れられる弱肉強食世界である。できれば無縁でいないと、いのちは無い。今その一端を見たわけだ。ハマーが突っ込んできて爆発が起きる世界である。
「銀髪……さま」
　無明が半分泣きそうになって頭を抱えていると、気後れした少女の声がした。申し訳なさそうにまなじりが下がっている。さっき、ハマーを消し飛ばした鬼児とは思えないほど、ふつうの人間である。気配も、においも、すべてだ。人食い無明が血を舐めるまで気付かなかったほどなのだ。
「わたしを……一緒にいてくださ、るの、ですか……」
　その声があまりに泣きそうだったのだが、無明は気を取り直し、
「ば、ばかを言うんじゃねえ！　オレはただの人食いだ、鬼児などまっぴらよ！」
　と、ふわりと飛んで逃げようとした。しかし、空中に飛び上がって、木の梢の高さを超えた辺りで、突然からだが重くなり、地面から吸い寄せられるように墜落した。
　ああ、あああ、と無明は地面にうずもれながら自分の舌を呪っ

た。いや、呪われたのは自分だ。鬼児の呪いにかかってしまった。もうこのこどもから逃げられない。

「銀の髪の、人食いさま」

鬼児はかしこまって、無明の銀髪に触れた。思わず人食いは銀髪を引っ込める。

「わたしに、願いをたすけて、ください……。わたしの、わたしは、人間になりたいのです」

無明は思わず口をあけた。引っ込めていた銀髪すらくたっと力を無くしたくらいだ。

どこかでアブラゼミの鳴き声がする。死に損ないか、気が違っているやつだ。

2. 人食い無明

2. 人食い無明

「ははん、なるほど。鬼どもが人間をおびきよせる疑似餌っことか」
　着物で着ぶくれた少女が小さく頷いた。無明が空中で、長い銀髪を垂らしてぷかぷか不真面目に浮いているのに大して、綿菓子のようにころころしたその女児は、地べたに正座し、表情も硬い。
　その鬼児の少女は人食い無明を騙すほどまで、人間のにおい・人間の外見を持っている。それは、彼女が鬼社会で担っていた役割のためという。
「はい。鬼の、たべる人間、おびきよせるために、わたしが人間のにおいの植えられ、人間の肌の、着させられました」
　その何重にも着込んでいる着物も、人間に化けるためのものだった。この衣は自らで脱ぎ着できるものではないらしく、無明に頼んだわけらしい。無明はさきほど、それを一枚剥いだら、鬼児の本領が漏れて出るのを目の当たりにしたところだ。しかし、あの放出で「漏れ」かい。無明は頭を抱えて、
「それで、何故人間になりたいんだ、鬼児？　鬼の仲間に入れてほしいんじゃねえのかよ……」
「わたしに、半端ものにした鬼は、わたしを……さげすむばかりです。わたし、は、もう、半端はいや、です……。わたしは、どちらかで、なりたい……です」
「いや、だから、何故そこで人間なのよ。仲間に入れてもらいてえなら鬼によ……」

「人間を、なれば、あなたが、喰ろうてくださる、の、……です」
さぞ、鬼どもの悔しがることです。鬼児の少女はそう言って微笑んだ。ああ、死にたいのか、なんだ。人食いの無明は鼻をならして、空中で寝返りを打った。その少女のひとみは、絶望に歪んでもいなかったし、復讐に燃えてもいなかった。ただ、夏の真昼時のひかりを取り込んで、海のようにきらきらしていた。思わず舐めたらうまいだろうなァと思って、あわてて舌のしびれを思い出したりしたくらいだ。
しかし、無明はそのきらきらした瞳を正直、直視できない。ばつがわるい。なんども空中でごろごろ寝返る。どうしたものか、なんて言おう、あれは信じている、ほんとのこと言ったらオレもハマーのように消し飛ばされるんじゃ……
――実は人食い無明は人食いではない。
ただの無害な霊魂出身で、そのながい銀髪をあやつって人を転ばせたりいたずらしたりしてかるい怪我をさせ、血をぺろっと舐めるだけの、かわいい物の怪である。鬼に較べれば毛埃くらいの低級さだ。
人食いは、無明神社に住み着いていた、前の奴である。それが今の無明に全部放り投げてどこぞへ放擲し、無明は最初こそ分不相応な肩書きを愉しんだが、あんまり畏れて人が来ないので困り果てていたのだ。
無明は考えた。
今、実は無能の物の怪であることを言えば、ハマーの二の舞。逃げるにも呪いのせいで逃げられない。鬼児に紐を付けられている状態である。
一番てっとりばやいのは、彼女ののぞみをかなえてやることではないか。なんとかしてこの人間らしい鬼児を真に人間にしてやる。そうすれば無害だ。人畜だ。それからこっちの無能を明かしたとし

て、ハマーされるようなことはあるまい。よし、しばらくは人食い無明でいよう。
無明は身を起こして、地面に降り立った。銀髪の先っちょを偉そうにふんぞりかえらせて、「いいだろう」。
「お前が人間になる方法を探してやる。そんで、そのあと、オレがまるっと喰らってやる」
鬼児は、ひかりを溜め込んだ例の大きな瞳を見開き、ぼさぼさの頭を下げた。
「ありがとうございい、ます、銀髪さま」
正直、後ろめたさを感じなかったわけではないが、無明がうまいこと立ち回るにはこれしかない。ひりひりと痛む舌を噛み、人食いの青年は、長い銀髪を操って、さきほど剥いだ綾衣を拾って、綿菓子のような少女の腕に通してやった。
せめて、できるだけ人間のにおいでいてくれないと、無明は自己嫌悪でおかしくなりそうだったのだ。
「……俺の名前は無明だ、銀髪って呼ぶんじゃねえ！」
「はい、無明さま」
鬼児は非常に礼儀が正しかった。衣の数だけよそいき仕様なんじゃないかしらん、と真剣に訝るくらいだ。貶められた者の卑しい目つきこそしていないが、きっと下手に出ることしか知らないのだろう。
――ということで、啖呵を切ったのはいいものの、鬼を人間にする方法なぞ、実は無明には皆目検討がついていなかった。鬼児に尋ねると、首を振る。「人食いさまを、喰われていただくことしか、考えていませんでした」。
じゃどうすんだよ、と言いかけた口をふさいで、無明は頭を抱えた。とりあえず人里へ降りてみるのはどうだろう。あの狂暴な鬼たちも、まさか人のいる前であんな暴れ方はするまい。まず保身。よし、まちだ。まちへ行こう。
……しかし、連れは着物姿の少女である。しかも何重にも着ぶく

れしている。いくら人間らしいといっても、確実に不審がられるだろう（無明は人に見えないのでけっこうである）。
どうしよう、どうしたものか、空中でもんどりをうって考え込んでいる人食いに、鬼児の表情が訝しげになった時、無明の耳にある音がきこえた。太鼓の音である。囃子の音だ。
がばっとばかりに銀髪は身体を起こした。根本を残して粉々になった鳥居の向こうに広がる、夏の終わりのまちから、不意打ちのようになま暖かい風がきた。
「やった」
無明はかたむいてべったりした陽光を浴びながら、胸がすくのを感じた。
「おまえ、すごいぞ。今日はまつりだ」

3. ざらめ

3. ざらめ

あたりには浴衣を着たひとびとでごった返していた。小さな鎮守の森に、荒廃した無明神社を残しておく程度に郊外であるちいさなまちの、目抜き通りを中心にして、そこらじゅうに露天がひらいていた。無明は空中にぷかぷか浮いて、ひさびさの人里にほうほうと鼻をならしている。大して鬼児のほうは、途方にくれたように、中途半端に右往左往をくりかえし、何度も頭上の無明に視線を送っている。

日は大分かたむき、空はゆうやけからすみれ色になってきている。蝉の鳴き声と、はやしの音がごちゃごちゃになってとおくのほうで反響している。

なるほど、着物すがたの少女もこの人混みもあいまって目立っていない。しかし立ちつくしているうえに、何もない上空（じっさいは無明がいる）に視線をやっているので、

「おい、お前。あやしまれるぞ、もっと楽しげに動き回らねえと」

「で、でも、わたし、こんな人たくさん、初めてで、……です」

「人のなかで行動したほうが、おまえもちぃっと人になる方法に近づくかもわからんだろ、ほれ、動け、びくびくすんな、オレを見んな、迷子って思われたら困るっつうの……ホラ、あれは食い物を売ってんだ。ひとつ買ってきてみろ」

前半は完全に無明の捏造と希望的観測の口でまかせだが、鬼児はおおきく頷いて、ようやく道のはじを歩き出した。

無明が示したのは綿菓子屋である。

そういえば、と思って、空中にぷかぷかしている銀髪は、毛先を繰ってポケットから小銭を何枚か出し、少女に押しつけた。当たり前のように賽銭箱の中身である。銀色のコインを五枚握らせ、「これと交換するんだ」と念を押す。
「……無明さま、人間のこと、お詳しいです」
「オレはむかしは人間だったんだ」
出店の主人の人間も、着物姿の少女を大して不審に思わなかったようで、鬼児はあっけなく綿菓子を手に入れた。巨大な繭玉にでも見えているのか、鬼児は呆然として口をつけない。あたりは暗くなってきて、少しずつ人も出てきている。空気は地面から耳元あたりに浮ついて、立ち上るようになり、耳や目が遠くのものと近くのものを捉えようと忙しくなる。やがて鼻の奥のほうを中心に、五感がぼやんとしてくる。祭りの夜になる。
食べてみろよ、と何度も言って、食べ方まで指南してやって、鬼児はようやく一口を食べた。無明は斜め上からそのようすを伺っていたのだが、鬼児の顔が、さっと紅色になるのを見た。割り箸を握る、みかんのふさのように小さく短い指も真っ赤になる。
「溶けた……です」
「ざらめだからな。知らないのか。綿菓子みてえなナリをしてんのによ」
こう、まんまるで、白くて。無明がニタニタ笑いながら言うと、鬼児はあいまいに口の端をゆるめた。しばらく沈黙が続いた。なにを考えているのか、銀髪の妖怪は、失言をしたかな、と正直どきっとした。だって、泣かれると困る。泣かれたら人が寄る、どうしたのなんて聞かれたらいろいろまずい――やばい、と思ったあとの胸の空白に、無明はあわててざまざまな理由を並べて立てた。でも鬼児は泣いているわけではなかった。
このとき、祭りの灯りに照らされた横顔が、甘く、溶けて、いなくなる、ということについて、きっと考えていたのだ、と無明が思い至ったのはずっと後のことだった。

「おいしいかい、お嬢ちゃん」
という声がかかった。綿菓子屋の店主だ。少女が購入後も店の前でぼんやりしているのだ（実際は無明と会話しているのだが）、何事かと思ったのだろう。
「何歳だい、お名前は？」
気の利いた立ち回りは鬼児にはできなかった。その場で立ちすくんで、視線をきょろきょろさせて、口角を上げたり下げたりしてしまう。あげく、無明のいる上空にまた助けを求めるように視線をやる。無明はやばい、やばい、と、鬼児の耳元まで寄って、「十歳！」。鬼児は「じゅっさい……」。名前。名前。名前、名前、名前。無明はあわてて考えて、
「ざらめ！」
鬼児の肩がびっくりして、息をはっと吐いて、それから顔を真っ赤にし、視線を上空にやったまま、「ざらめ……」とため息のように答えた。人見知りをする子だとでも思ったのか、中年のおじさんの店主はそうかい、と優しく言って、あとは深入りしなかった。すかさず、銀髪が鬼児の背中をせっついて歩かせる。
大した距離のない通りだが、鬼児の足でとぼとぼ歩くと、まるで三十三間のようだ。鬼児はまた黙り込んでしまった。無明はほっと胸をなでおろしていた。
たくさんの話し声が、かたなで集まりこなたで集まり、鬼児の頭上をすわっと通り過ぎていく。小豆をけたたましくかき混ぜる時のような、同時多発のこまかい音が群れになってたくさん走っていく。鬼たちがだいすきな人間の皮膚のにおいで充ちている。汗と皮脂と白粉のにおいがごっちゃになって、むわんとあたりに漂っている。でも、鬼児には手元にある綿菓子の、ざらめのにおいのほうが強い。
「ざらめ……」
そう呟いた鬼児の頭上で、無明が「あ？」と気まずそうな声を出した。
「だって、怪しまれるだろ、あそこでひるんだら！　綿菓子みてえ

な見た目だしさ、お前、思わず」
「わたし、ざらめの、言って、良いです？」
「は？」
「わたしを、名前、ざらめです？」
無明のいる斜め上の空中を見上げる鬼児の瞳が、出会った時のように、大きく、そして光を取り込んできらきらしていた。鬼児の感情の因果の定則がいまいちぴんと来ないで、無明は不可解な顔で、空中に寝転がる。そしたら急に、狂暴人食いの使命感を思い出して、
「お、おう！　呼び名が無くて面倒くせえ。そのうちオレが綿菓子みたいに食べるからな」
「はい」
それがお願いです。ざらめは目元と口元が、溶けてふやけたような、やわらかい顔でわらった。本当に舐めたら甘いんじゃないのか、と無明が訝ったほどだった。

4. カップル・シート

ざらめがはじめて（と言っても数時間しか共にしていないが）我が儘を言ったので、無明はとても驚いた。この鬼児は気味が悪いくらい大人しい。きっと、ことばの無力を思い知っているんだと思われる。

ざらめが言ったのは、無明に席についてくれということだ。細かく言うと、テーブルを挟んで向かいに座ってくれ、と言ったのだ。

祭のために道路は開放されており、車道の上にはいくらかのテーブルと椅子が置かれていた。四角い木製のテーブルと、安そうなプラスティックの椅子である。ぼんやりと祭の灯りに浮かび上がっているが、誰も利用していない。ざらめは嬉々としてそれに座った。ジュースのコップを（買い物の手法を会得した）握りしめ、木で出来たテーブルが真四角なのに、顔を紅潮させている。角を撫でたり、うっとりとため息をついたりする。

「すごい。きれい。いいなあ。きれい」

うらやましい……という声があつい吐息と共に何度も漏れていた。まるで、人間の女が高値の洋服を選んでいる時のようだ。へんなやつだなあ、と、ここ数分で五十回目くらいの感想をぼんやり思い浮かべながら、しかし無明はなんとなく喉の奥がかゆくなるような、へんな感じがした。そこに、何かことばが引っかかって、やきもきしているかのようなかゆさだった。それは、何となく無明を、ざらめの向かいに座らせる作用を持っていた。

浮かんでいた無明が椅子に着地して（座面に不良座りである）、じろっ、と睨んでやると、ざらめはその白い餅のような顔を真っ赤にしていた。もしかしたら、祭りのあかりの加減でそう見えたのか

も知れないが、指先や耳の先が、ぼんやりと赤く透けていた。
ふと、人食いは、自分が今ついているテーブルが、歩行者天国の道路の上ではなく、次元が少しずれた世界の誰かのテーブルの上にあるのではないか、と、不思議な思いを起こした。
「こうするのを、あこがれだったんです」
ざらめのどもった声で、無明は我に返った。そういえば、我々はもともと、次元が少しずれた世界の生き物なのだった。
「こうやって、向かい合わせに、誰かと座るの。ずっとやってみたかったんです」
でも、そうか、今、人間の世界と我々の世界と、ずこくあいまいな場所に居る。無明は銀色の髪で、腫れぼったく暑くおもい空気を感知しながら考えた。人間の次元が一枚目。俺たちの次元が二枚目だったら、今は一枚目の裏あたり。そこで、俺は鬼の前に座っている。
「……無明さま？」
「うわっ」
突然、銀髪を触られたので、無明は思わず声を上げた。ざらめが、蜘蛛の糸を掴むようにして銀髪を握っていた。それから、さっきまで上気していた顔を真っ白にして、ものすごい後悔の色を瞳に湛えて、震える声で「ごめんなさい」と言った。
「べ、別に怒ってたわけじゃねえよ！　良いからっ、一人で楽しそうにしてろ！　俺に話しかけんな！」
怪しまれるだろ、と怒鳴って、なんかもう、頭がカッカして、無明は銀髪をひょいひょいと適当に伸ばしてそこらの屋台から品物をたくさん失敬してきた。こっちでカステラ、こっちでお面、こっちで飴細工、こっちでハッカ笛。もちろん、こっそり。それを矢継ぎ早にざらめの前に並べ立てる。お金、とざらめが言うが、無視。
「それと、その変なかしこまり方、窮屈だからやめろよ！　いいか、人間てのは、もっと、我が儘で、意地汚ねえの。有り難くタダ飯を食うの。机はきれいに四角いの。あと、その無明サマっていうのも、

うざってえ！　おれはそもそも、人食いサマじゃ……」
『無え』、をすんでのところで飲み込んで、あわてて無明は口をつぐんだ。思わずあぶねええ、という顔が出る。危ない。コイツを幻滅させたらコッチの命が無いのだった。表情を取り繕って、ざらめの方を見ると、無明の心配事など何処吹く風で飴細工などに感心している。顔はまた赤く透き通っている。皮膚はオレンジ色に透けている。
だんだんに夜の気配が濃くなってきて、人のがやがやしたものが、世界の主人公格から、脇役にそっと身を縮ませる。耳の遠くでぼんぼりが温かく、目の前の鬼児が顔を真っ赤にしている。テーブルは正確に四角い。
人食いは思いがけず微笑んだ。

片方の席が透き通っているカップル・シートに、少女が座っている。幸福に充ちた顔で向かいを見つめる。少女にしか見えない、人食いが座っていて、ああだこうだと文句を言って、楽しいか、と尋ねる。鬼児は、飴がこんなに甘いのを、初めて感じて、泣きそうになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3223s/

銀髪と鬼児

2011年11月2日02時16分発行